

第40回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

【正賞】

『浦尻貝塚 縄文の丘公園 貝塚観察館』

国指定史跡「浦尻貝塚」縄文の丘公園内に建てられた貝塚遺跡の展示施設である。海が見下ろせる広大な丘の中心にあり、小さな建築物が時空を超える入り口のような役割を果たし、未来までつながる思いを馳せる空間となっている。傾斜面に突き出た展示室となる「箱」の高さを抑え、基礎形状も斜面に眠る遺跡を傷めないように慎重に決められた。白い建築空間と土色の貝塚とのコントラストが明快であり、ミニマルな箱としての建築を徹底している。史跡としての制約を受けながらも、そこから「何が可能か」「なぜ施設を作るのか」という根本的な問題を熟考し、地域住民と対話を重ね、最適解を導き出した。先の大地震で縄文時代の海岸線まで津波が到達し、この土地を離れて暮らす人も多い中で、住民がサポーターとして維持・管理に関わるなど、地域再生の一環として重要な役割を果たしている。縄文時代と震災の記憶を重ねて想起させる得がたい施設であり、建築の力を感じさせる。

【準賞】

『矢澤酒造店』

奥州最南端に位置する矢祭の恵まれた気候風土の中で醸される日本酒の製造・販売施設である。手前の大きく古い蔵の風格や、背後に自生する竹林をうまく景観にいかして、落ち着いた品の良い建築となっている。地元で調達した杉による突き上げ式の木材架構は見応えがあり、構造と意匠が一致した味わいは、忘れがたい印象を受ける。既存の古い店舗や酒蔵との対比において、新しい施設が歴史を受け継ぎながら、新たなチャレンジをしようという意志が建築にも表現されている。既存建屋をリスペクトしながら、既存の擁壁まで朱色に染めてデザインの一部として取り込んでしまうなど全体コーディネートが素晴らしく、「人を引き寄せる場」となっており、周辺環境、既存建築物と調和した、端正な佇まいの美しい建築である。

【優秀賞】

『いわき南清苑』

敷地内の建替えという制約がある中で、丘陵地に囲まれた地形を上手に利用し、建築された火葬場である。らしくない建物を目指し、三角屋根を効果的に配してボリュームのある火葬炉を目立たなくするなど圧迫感を感じさせない。収骨室は故人との最期の別れの場として円蓋状の天井と円形の平面構成により象徴性を持った静謐な空間にデザインされている。また、一筆書きの動線計画により、会葬者同士が交わらないよう配慮されるなど、さりげない心遣いが感じられる。細部に至るまで会葬者の心情に寄り添った工夫を施し、静かな安らぎと故人への感謝の想いを馳せる時間を提供する建築に仕上がっている。

『認定こども園 らみどり』

須賀川市中心地の自然が残された一角に建築された、連続する三角屋根が特徴的なこども園である。園舎は、勾配のついた切妻屋根が園庭に大きく開いており、桜が残る丘陵地の起伏をいかした屋外とのつながりがよく練られており、子どもたちが自然の中で学び、遊ぶ環境が整えられている。木のぬくもりを感じる室内や、床下空調、網戸の設置など、子どもたちが安心して過ごせる工夫が随所に見られ、機能性とデザインがうまく調和している。屋根の架構は相互依存構造となっており、ダイナミックで明るい空間を実現している。地形、配置及び構造計画が理にかなった建築解といえる。末永く子どもたちの記憶に残るこども園になることを期待したい。

『矢吹町複合施設 KOKOTTO』

公民館、図書館、子育て支援、観光交流の4つの機能を備えた町のシンボルとしても重要な役割も果たす複合施設である。町の特産品のトマトをイメージした入口のオブジェが、地域のアイデンティティを象徴している。1階のエントランスホールと2階の図書館の連続性が良く、利用者が快適に過ごせる空間が広がっている。秋祭りの目玉となる大屋台とそれを納める屋台蔵の展示は地域の伝統文化を感じさせ、祭り際には駐車場が広場として活用されることで賑わいを創出している。図書館は、利用者の年齢層によるエリア設定、読書手帳サービスの実施など、運営上の工夫が光る。住民のニーズにきめ細かく応える地域に根ざした建築といえる。

【特別部門賞】

『旧小峰城太鼓櫓』

小峰城に関わる建造物で唯一現存する貴重な建築物であり、江戸時代から現代に至るまで移築と用途変更を経て保存されてきた。江戸時代から継承されてきた古材と構造をできる限りいかながら現行法に適合するよう修復、復元し、一般利用も可能な建築として再生することに大きな意義を感じる。特に2階部分は、太鼓櫓時代の原型と大きく変わりつつも、2度の移築にあたって耐震化を施すなど貴重な建築遺構の保護活動に真摯に取り組む姿勢は高く評価するべきものである。地域住民により見学や茶会などで活用され、老朽化し今にも廃れようとしていた建物に、再び命が吹き込まれている。

『福島県県中児童相談所』

児童相談所と一時保護施設を一体化し、心を落ち着かせる空間づくりに重点を置いた施設である。子どもたちの生活エリアは家庭的な雰囲気重視し、木材を多用した温かみのある内部空間が実現されている。デザインは統制が取れ、機能性も高く、施設の特性に応じた工夫が随所に見られる。インテリアの色使いやディテールなどにも細やかな気遣いが感じられる。相談室への導線には大きな窓や緑が取り入れられ、緊張や不安を和らげる配慮がされている。施設の機能性と居住性の両立に成功しており、住宅のようなスケール感を意識した狙いどおり、利用者に配慮した心地よい空間設計となっている。

『古川利意記念美術館「農と暮らし」』

150年の歴史を持つ個人所有の土蔵が、地元文化人である故・古川利意氏の作品を展示する美術館として、地元で伝わる職人の技術と若いアーティストたちの手によって生まれ変わった。元々の構造と仕上げを尊重し改修を最小限に抑えながらも、小さな展示空間を巧みに演出している。2階の展示スペースには引き出し式の棚を設けるなど、収納と展示を両立させ、機能的でありながら美術品の保護にも配慮されている。地域おこし協力隊が契機となったこのプロジェクトは、小さな灯火でありながら地方と都市の人的交流を生み出し、美術と建築文化を継承する意義のある取組であり、「町おこし」の可能性を感じさせる建築である。

【復興賞】

『とみおかアーカイブ・ミュージアム』

震災前の富岡町の「暮らし」と自然災害・原子力災害の「惨禍」を伝え、ふるさとの記憶と記録を保存・公開して未来へ受け継ぐための博物館である。強い意志で「資料を守る」姿勢が表れた、どっしりとした外観が印象的である。被災した学芸員自らの手による展示設計や、収蔵庫の公開といった工夫が光り、そこには郷土愛が溢れている。町民を主語とするプログラムや、展示替えに対応する動線計画も優れており、来館者に町の歴史や震災の記憶を深く訴えている。自分のまちの「あたりまえの日常」に意識して向き合う大切さを気づかせてくれる、貴重な施設である。

『檜葉町地域活動拠点施設「まざらっせ」』

保育園から公民館への用途変更を経て今回、地域活動拠点施設へとリノベーションされたこの建築物は、帰村定住促進という目的とともに記憶の継承を目指した多機能施設である。震災前に耐震補強された元の保育園の構造はそのままに、改修で新設された屋外へ誘導するテラスや室内から木製庇、透過性の高い大庇へと連なるグラデーションは視覚的にも美しく実に気持ちがいい。多用途に対応するため、コワーキングスペースやライブラリー、アトリエなどが整備され、地域住民と移住者の交流の場として使用されている。若い人たちが積極的、かつ丁寧に施設を使用しており、運営面にも積極性が感じられる。

『ひみつ基地「どきどき」』

飯舘村の復興再生に向け、多様な世代の帰村と交流を促し、子どもたちが安全・安心に遊ぶことができる屋内運動施設である。その意図は十分反映され、親子がまた来訪したくなるような工夫が施されている。「木に親しみ遊ぶ」をコンセプトに設計され、木材をふんだんに使用した温かみのある内部空間と、独創的な木製遊具が特徴で、特に天井の高い木育広場は親子がのびのびと遊ぶことができる。両手を広げたイメージの外観は斬新で目を引く独特の造形で、お父さんとお母さんを外観の塔にシンボリックに表現したこの施設を核に、故郷に帰った多様な世代の交流が深まることを期待したい。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については五十音順。)